

生態心理学者ギブソンの基本的な哲学的立場は、実在論である。これは、デカルト、カントといった近代哲学者が立脚していた主観主義・構成主義への彼の反発によくあらわれている。しかし他方で、ギブソンの思想には、フッサール現象学との類似点も指摘される。心理学である以上避けがたい内的なものとのかかわりを想起すれば、この見方にも肯けるものがある。しかしそうすると、フッサールが標榜するいわゆる超越論的現象学との関係は微妙な緊張を帯びてくる。はたして、ギブソンの実在論とはどのようなものなのであろうか。今日の観点からみて、その重要性はどこにあるのだろうか。

今回は、ギブソンの思想が形成されてきた直接の思想史的背景であるジェイムズの根本的経験論、新実在論の主張を意識しながら、そこに一貫して流れる実在論がもつ「ひろがり」について概観することで、現代において実在論を展開することのインパクトについて考えてみたい。具体的には、いわゆる分析哲学登場以前のアメリカにおける実在論が、同時代のケンブリッジ学派や独逸学派・実在論的現象学とのあいだにもっていたさまざまな接点・相似性を拾い上げてみる。これらの個性豊かな諸学派を同一視することは決してできないが、それでもなお、その多様性の中には一貫した形而上学的態度、すなわち実在論への傾向が認められる。こうした流れの中に位置づけられたとき、ギブソンの実在論はどのような姿をとって私たちの前に現れるだろうか。

また、実存主義や言語論的転回が隆盛した二十世紀後半は実在論にとって冬の時代だったが、近年の存在論・形而上学の復興によって、こうした状況に変化が生じているように見える。関係の存在論的地位をめぐる議論のように、かつて論じられたテーマが現代の形而上学において再び取り上げられているケースもある。このような学界の動向を踏まえ、今日におけるギブソンの思想の意義についても考察してみたい。